

## カルトゥムの砂嵐

日野舜也

1982年、私は、はじめてスーダンでのフィールドワークに従事した。西アフリカのカメルーンで、フルベ都市民の調査をおこなってきたが、「わたしのおじいさんの兄弟が昔メッカ巡礼にでかけたまま帰ってこない」というような話を聞かされてきた。いったい、こういう人々はどこに行ってしまったのだろうという疑問を抱きつづけた私は、スーダンの調査をやるという故富川盛道先生の呼びかけにすぐに応えたのであった。

当時、カルトゥム大学のアジア・アフリカ研究所長をつとめられていたユースフ・ファドウル・ハッサン教授のアドバイスもあって、調査地は、ブルー・ナイル中流部のエル・ロセイレス周辺に決め、カルトゥムで、研究所や国立公文書館での予備調査にあたっていた。アフリカの気候データが得られる都市のなかでは、トンブクトゥとならんで、最も平均気温が高い(28.7度)カルトゥムであるが、ちょうど乾期のさなかで、日射しはきつかったが、日陰ではさわやかな涼風を感じるといった風情で、夕刻のナイル河畔の散策は優雅なひとときであった。さて、そのある日、私は、ホワイト・ナイル対岸のオムドゥルマンへ出かけた。黄金に輝くマフディの墓所をたずねたり、家畜市場へ行ったり、お茶や甘いコーヒーを楽しんだり、ゆっくりして

いたのだが、ふと、南の空をみると、茶色の煙が立ちのぼり、広範囲にひろがったのである。化学工場の火災か？一瞬、私はそう思った。何分もしないうちに、煙は雲のように舞い上がり、やがて、オムドゥルマン全体がその茶色の雲につつまれた。強い風が吹き、砂粒がばちばちと音をたてて私の全身を打ち、白い開襟シャツはたちまち真っ赤染まった。とても立ってはいられない。私は、まず、そこいらに逃げる場所を探した。おおくの家がまわりを白壁で囲んでいるので、なかなか適当な場所が見つからない。狭い路地の白壁に身を潜めた私は、そのまま、20分ほど待った。砂嵐は北へ移って行って、あたりの砂埃は次第におさまった。人々は、何事もなかったようにまた歩きはじめていた。

(ひの しゅんや 京都文教大学)

